

# 人間の経済

Ningen no keizai.

62

2022年10月25日刊行

## 目次

日本経済新聞に謹んでもの申す :このさい環境税制改革による  
脱原発を!

朴 勝俊

「元氣やさいネット」と「とらたぬ農業協働組合」のこと  
片柳義春

日本経済新聞に謹んでもの申す：

このさい環境税制改革による脱原発を！

朴 勝俊 (経済学者)

日本経済新聞(以下「日経」)の記事、「エネルギー政策活路見えず 「原発不信」で目算狂う」(2002.10.19)を読んで不安を覚えた。そこでは、経産省の出した数字が一人歩きどころか独走していた。

記事の内容は以下のとおり：最近の東京電力による原発の点検記録改ざん問題で、原発に対する国民の不信感がつのり、原発建設が停滞すれば、炭酸ガス削減目標が達成できなくなるおそれがある。従来の削減計画は2010年度までに原発を9~12基建設することが前提だからだ。原発は一基当たり、日本の炭酸ガス排出量(2000年)の0.5%を抑制できるが、「計画通り原発を増やせない場合は、経済成長が滞るのを覚悟で石油など化石燃料に高率の炭素税を課税し、消費を抑制せざるを得ない」。経産省・総合資源エネルギー調査会(エネ調)の昨年の試算では、原発を建設しないと2008~10年度の成長率がほぼゼロとなり、製造業生産額が19兆円、個人消費が12兆円も減少する。

この記事の問題は、エネ調が前提を明かさず(ひょっとすると過大に)見積もった炭素税の悪影響を、日経がそのまま引用している点にある。実はこの試算は、過去に国内で行われた数々の炭素税シミュレーションの中でも例外的に悲観的である。エネ調の試算と、旧環境庁がまとめた過去のシミュレーションの数々を比較してみよう。

問題のエネ調による「原発を増設しないケース」の試算は、報告書『今後のエネルギー政策について』の巻末に「参考5」として掲載されている。これは当初、報告書の本体に組み込まれるはずであったが、なぜか最終版では巻末の参考に追いやられた。この試算では、基準ケースと比べて原発が9~13基少ないぶん、2010年において1700万トンの炭酸ガスを余分に削減せねばならない。そのため、およそ炭素1トンあたり28000円(税収は7兆円規模)もの「高税率」の炭素税を課税するが、その結果、2010年までの年経済成長率が平均0.4%下落(2005年度~2010年度は0.7%下落)、2008年度~2010年度はほぼゼロ成長となり約228万人の雇用が失われるというものである。

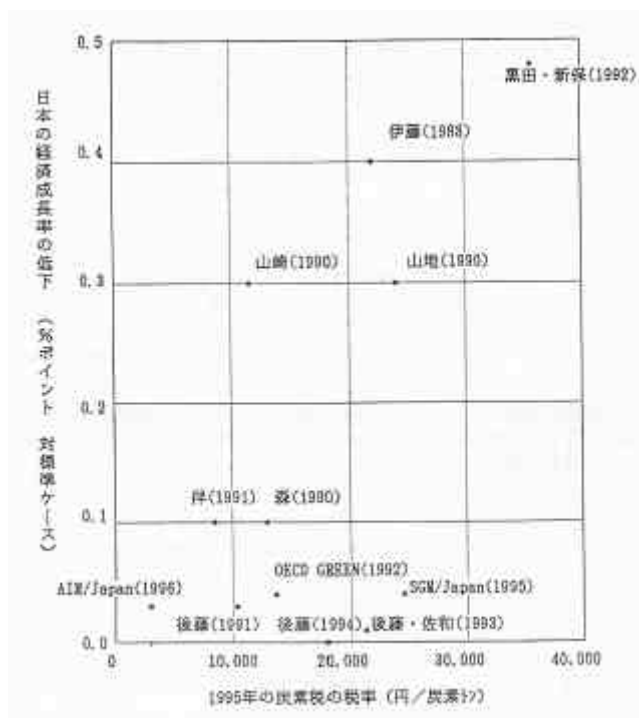
読者はすさまじい影響だと思われるかもしれない。しかし、次の図1と見比べて見ると、この試算の「異常さ」が理解できるであろう。これは旧環境庁の設置した温暖化問

題に関する検討会の 1996 年の報告書から引用した図で、横軸に炭素税率、縦軸に予測期間内の各年経済成長率の平均低下幅を示し、既存研究の結果をプロットしたものである。図にみられるように、炭素1トンあたり28000 円の炭素税は既存研究のシナリオと比べればさほど全く高いものではない。また、この税率の範囲で 0.5%以上も成長率が低下するものはみられない。

また、1700 万トンの炭酸ガス削減というも実は少ない。図に示された研究はいずれも、2000 年以降の炭酸ガス排出量を 1990 年レベルで維持するという条件の下での計算結果であるが、その条件を満たすための削減量の方がよほど大きいのだ。例えば、図中の後藤氏が行った計算では、2010 年の炭酸ガス排出量を、3.796 億トンから 3.200 億トンまで、5960 万トンも削減すると想定しているが、経済成長率の低下は微々たるものである。

成長率下落幅の違いは、モデル構造の違い、基準となる成長率の想定の違い、税収の用途の違いなどが影響している。筆者の見るところ、中でも税収の用途の違いが大きい。通常、炭素税の税収は政府支出に使われるか、減税や補助金を通じて国内経済に還流するため、そもそも大きな経済的損失を生じない。しかし、最も右上に位置する黒田・神保(1992)では、税収は海外に貯蓄されて国内経済に還流しないという想定のため、国内経済の落ち込みが著しく大きくなるのは当然である。エネ調試算に迫る結果だ。

図 1：旧環境庁による炭素税シミュレーションのレビュー



実は、この奇妙な想定に基づいて高いコストを算出した黒田昌裕氏こそ、昨年のエネ調試算を請け負った人物である。このように、税収の用途が決定的な結果の違いをもたらすのだが、昨年のエネ調試算における税収用途想定を、黒田氏は明らかにしていない。私は、この報告書が策定中の一般意見募集で、この想定を公開と、別の想定のもとでの計算のやり直しを求める意見書を届けたが反応はなかった。

ところで、私が税収用途にこだわるのは、「環境税制改革の二重

の配当」という論点にも関係する。「二重の配当」とは、税収使途しだいで雇用が増加し経済が活性化する可能性のことであり、ドイツの環境税制改革導入時などには、政府みずから宣伝するに至っている。日本の既存の炭素税シミュレーションで、この論点に配慮したものはなかったため、筆者自らが行った計算では、炭素 1 トンあたり 3 万円弱の課税でも、労働負担の軽減を通じて還元すれば、GDP 水準も雇用もともに上昇することが示唆されている。

むしろ、「東電事件」を機に原発建設を放棄し、原発も課税対象に含めたエネルギー税を課税し、その税収を減税財源として活用する方が、政策的に望ましい。原発建設を放棄すれば、原発建設の地元に配布すべき多額の「迷惑料」も大幅に節約できることであろう。

## 文献

総合資源エネルギー調査会 総合部会 需給部会 報告書『今後のエネルギー政策について』(平成 13 年 7 月) <http://www.meti.go.jp/report/whitepaper/index.html>

環境庁『地球温暖化経済システム検討会報告書(第 3 回報告書)』平成 8 年 7 月

朴勝俊『環境税制改革の応用一般均衡 (CGE) 分析』『国民経済雑誌』186(2)、平成 14 年 8 月

## 「元気やさいネット」と「とらため農業協働組合」のこと

片柳義春

1957年に東京都中央区新富町に生まれる。44歳。

慶応義塾大学卒業

とらため農業協働組合 代表責任者

### 1. 「市場」の復権運動としての「元気やさいネット」

何じゃ、この低い自給率は？ 農薬にまみれた食べ物を食べと言うのか？

現在の農業は非常に厳しい時代を迎えています。輸入農産物がどっと押し寄せ、自給率がわずか30パーセント台しかありません。この自給率はアフリカや砂漠の飢餓地帯の自給率です。さらに輸入農産物からは高濃度の農薬や日本で使ってはいけない農薬が検出され、問題になっております。国内でもまたしかり。先進諸国に較べて単位面積あたりの農薬使用量が10倍という日本の状態はかなり危ないと言えます。

例えば私が以前農家向けの雑誌を販売していたときの事です。あるキュウリのハウス栽培農家を訪問したとき、2歳ぐらいのヨチヨチ歩きの子どもがハウスの中からキュウリをかじりながらでてきました。それを見るや否や母親が血相を変えて子どもを逆さにして、飲み込んだ物を全て吐き出させました。こんなキュウリを私たちは知らずに食べているのです。農薬をまいている農家の方もかなり非道い状況です。先日知り合った有機栽培の農家の方は、若いころ農薬が原因で失明する寸前までになったそうです。視力がドンドン衰えてきて、これは大変だと言うことになり、あちらこちらの病院を回ったけれども原因がつかめず、最後に北里病院で農薬が原因だと判ったそうです。北里の眼科の診療室に入るや否や、「あなた農家でしょう？」と言われたそうです。家中の農薬を病院に持ち込み、薄い液を皮膚に注射してようやく3種類の農薬が原因であると突き止めました。そのうち二つはデナポンとオルトランというかなりよく使われる「強くない」農薬でした。私自身も田んぼの除草剤や種子の殺菌剤や先ほどのオルトラ

ンでかなり非道い目に遭っております。このような危険な化学物質を日常的に使っているのは塗装屋さんと農家くらいではないかと思っています。

### 出発点は「こんな物を家族に喰わせられるか！」

「こんな物を家族に喰わせられるか」という想いで、有機農業に関心を持ち始め、若い頃、自給菜園を作り無農薬栽培に取り組みました。近所の農家の方からは「農薬を使わないで、出来るわけがないよ」などと揶揄されましたが、そういうことを言っている農家も自家用の畑では無農薬栽培を行っておりまして。要するに「市場」で高く売れる「見栄えの良いもの」を作ることを目指しているのが、今の一般の農業のあり方です。これに対して 30 年ほど前から有機農業を目指す人々が現れました。特に有吉佐和子の「複合汚染」と言う本がでてから、急速に農薬問題に関心が集まり、一時はパニックのようになって、主婦が有機野菜を求めて、右往左往した時代が一瞬ありました。私も高校生の頃から自宅の畑で野菜を育て、ニワトリを放し飼いにして近所の方に売っていましたが、「複合汚染」が話題になるや近所の奥さんたちが押し掛けてきて、栽培途中の野菜までもみんな持って行ってしまう事件がありました。日本人特有の熱しやすく冷めやすい体質ですぐに、有機野菜の騒動など終わってしまいました。その後「偽装有機」農産物が氾濫して、少しでも鶏糞を肥料にすれば「有機」であるなどという状態になり、いかにも日本中に有機栽培農家が出現したような錯覚に陥りました。この状態は JAS の有機認定制度が出来て、なんとか一段落しました。しかし偽装が氾濫したおかげでまじめな有機栽培農家の信用も地に落ちてしまいました。農産物の「偽装」問題は根深く、たとえスーパーの有機野菜販売コーナーや生協や安全食品の業者などから買っていたとしても危ないです。これは、農産物を大量生産可能な工業製品と同じように、生協やスーパーや大規模な安全食品流通業者が大量生産・大量輸送・大量販売の仕組みを持ち込んでいるからです。

多くの農家との対話の中で、いつまでにどれだけの野菜を持ってこいという契約を結び、それに違反するとペナルティが科せられ、取引を打ち切られると言う状態にあるときのプレッシャーのすごさを幾度となく聞かされました。農産物ですから天候などに左右されて、荷がどうしてもそろわない時がでてきます。その時に何処からか判らないように紛れ込ませることを日常的にやっているという話を聞きます。こうしたことが BSE（狂牛病）事件や中国の農薬漬けほうれん草事件、国内の無登録農薬の使用事件ではっきりしてきて、もうみんなバレてしまった訳です。薄々感じていたこ

とがやっぱり本当だったのかあと言うのが普通の人の気持ちではないでしょうか？また、現在の非道い不況の中、失業・ホームレス・自殺が蔓延している状態で、特定の間人だけがズルをして儲けてやろうということは許さないという雰囲気があります。これまではうやむやにされていた原発の事故隠しなどももう出来ない状況が生まれつつあります。世の中の風向きが大きく変わってきたと思います。

### **流通の仕組みを自分たちで作らねばまともなものが食べられない！**

大量生産・大量輸送・大量販売から見捨てられた人々があります。小さな家族経営の農家、小さな地元の市場、町の小さな八百屋さん。ドンドン潰れています。数のそろえられない小さな農家や小さな市場を切り捨てるスーパー、大生協。巨大な流通の流れからどんどん人がはじき出されていくのです。そして何よりも排除されているのは「まともなものを喰いたい人間」です。私たちは「まともなものを喰う」ために自前の流通を考えねばならないのです。（大手の有機食品販売業者も本当のところは信用できません。）一方で、神奈川県内には有機栽培農家が点在しています。しかも 80 年代前半の有機農産物ブームが下火になり、会員数が減って苦しんでいる家族経営の農家や販売先がなかなか開拓できない新規就農者たちです。そして他方で私たちは「まともなものが喰いたい」と望んでいるわけです。この両者を結びつけるのが本当に求められている流通ではないでしょうか？

ところで現在会員制で有機野菜を宅配している流通業者があります。これらの流通業者も会員数が 1 万人を越えるような規模の大きなものとなり、生産者の間ではかなり悪い噂が飛び交っております。規模が大きくなれば、スーパーや生協と同じように大量生産・大量流通・大量販売となり、小回りが利かない状態になり、それ故に無理が生じ、偽装の温床が生まれてくることとなります。

かつての流通にも様々な問題があったわけで、礼賛するつもりはありませんが、例えば台風でほうれん草畑が水浸しになってしまい入荷量が極端に減って、市場の値段が 1 把 300 円以上になったとします。このとき町の八百さんは市場から仕入れるでしょうか？買い物客に日常接している八百屋さんですから、こんな高いものを買ってくれるお客さんがいないなら、絶対に仕入れません。そして自分のお店では、ほうれん草を買いに来たお客さんに、今日は台風で荷が入らなかったと説明して、代わりに大根、人参、ゴボウが安いから「煮っ転がし」にしたらあ、などとアドバイスするはずで。ところがスーパーや生協や大きな野菜宅配業者は一ヶ月前から

宣伝をうっているのに、何が何でも売らなきゃならない、バイヤーは顔を真っ赤にして怒鳴り散らしたり、真っ青になって胃薬を飲む事になります。結局下請け企業化した農家に何とか揃えさせるわけですが、ないものを出せと言われても、魔法使いではありませんから、どこからか集めてくる事になります。このような事が常態化している既存の流通システムを私たちは使いたくありません。

販路がなくて困っているまじめな有機栽培農家と食べ物に不安を抱き本当に安全なものを求めている消費者とを直結するシステムを作ろうという事で、この「元気やさいネット・やまと」を構想しました。

### 「消費者」というグローバリストの罠と「生産者」という考え方

たくさんの農産物や工業製品が「消費者の利益にかなう」という名目で、海外から入ってきます。

これらは多国籍企業化した日本や外国の企業によって行われています。そして経済のグローバル化が豊かな社会を導くような宣伝をしています。果たして本当でしょうか？ 私たちの周りには、失業者やホームレス、自殺者、半失業状態のフリーターが溢れているではありませんか？ こんな時代が今まであったのでしょうか？ 文明が進んで行けばバラ色の未来が待ち受けていると子どもの頃から信じ込まされていましたが、実際に目の当たりにしているのは一部のお金持ちと大多数の貧しい人に分かれていく社会です。確かに億ションや高級車を買う人たちもいます。方や、小さな公園にもホームレスがおり、大きな公園や河川敷にはたくさんのブルーシートの屋根が並ぶ様は尋常ではありません。自殺者が交通事故の死者の3倍もいるのが今の社会の姿です。本来社会とはお互いに助け合っていくコミュニティのはずです。そして人は「消費者」としてのみ生きている訳ではなく、「消費者」でありながらかつ「生産者」として生活しています。人件費が日本の30分の1~10分の1という中国などから入ってきたものが市場を席卷していきます。「消費者」として安い製品は助かりますが、「生産者」としては自分の仕事が奪われてしまいます。一次産業のみならず、物作りの二次産業やコンピュータなどの三次産業までもが仕事を失いつつあります。収入が少なくなったから、安い外国製品を買う、そうするとまた仕事が減り、収入が減る、その結果安い外国製品をもっと買うようになる、と言う悪循環に陥っています。こうした悪循環に対して「経済のグローバル化」を推進する人たちは、無慈悲にも「市場の原理」という名目で「市場が



ら退席願います」という言葉を返してきます。彼らのいう「市場」とは何なのでしょう？バブル経済を作り上げてはブッ壊し、世界の通貨をもてあそび、穀物や技術や資源を独占する一握りの人たちに翻弄されてきたのが、20世紀の私たちの暮らしではなかったのでしょうか？「国益を守る」と言う大義名分で見も知らぬ恨みもない人々同士が殺し合わねばならなかった、今も殺し合っている「仕掛け」または「罠」に私たちははまっているのではないのでしょうか？

この仕掛けから脱出する方法として、まず自分たちが「消費者」ではなく生産もしている「生費者」と言う考え方に立ち戻って下さい。そして自分たちのコミュニティの中にそれぞれの過不足分を融通しあう「自分たちの市場」を作ることを考えて欲しいのです。

### フリーマーケットが発想の原点

わたしたちの出発点は生活クラブ生協の会員が始めた「クラブママーズ」という小さな地域通貨のサークルでした。これは自分たちの不要になったものや特技などを地域通貨で交換しようというフリーマーケットの発想でした。まさに小さな「私たちの市場」に他なりません。この市場では原則として「クラ」という手帳方式の地域通貨を使おうという約束事があります。僕自身は何回かフリーマーケットに行って「フリマのプロ」という人たちに嫌な思いをしていたので地域通貨なら素性の知れない変なプロが紛れ込まなくていいなあと感じていましたし、何よりも大事な休日を潰さなくても、また高い所場代を払わなくても良いのが嬉しかったのです。しかしこのような面白い企画にもかかわらず、みんなの中に定着するのが非常に難しい事でした。「頼りにされる」あるいは「あてにする」市場としてはややインパクトが不足していました。

このグループが出来た頃、私は無農薬で花のポット苗を育てることに夢中になっていました。この苗を育てるのに大量の堆肥を作っていました。私の住んでいる中央林間という町はもともと小田急が戦前に開発した文化村で、かなり面白い人が住んでします。その中でも高層マンション建設に反対していた人で、多胡さんという方がおりました。この方はなんと3000坪もの敷地のお庭と茶室を地域の緑を残すために生前に大和市に寄贈されたのです。この方とは少し面識がありましたが、まさか市に寄贈して下さるとは思っていませんでした。ところが市に寄贈されるや否や、付近に住んでいるヒステリックな人から、落ち葉がひどい、毛虫が非道いなどというクレームが大和市にジャンジャン来るようになり、市は美しい桜並木

の枝を道路からはみ出している部分をブツブツきり、さらに奥の木立もバサバサと切り落としました。落ち葉もビニール袋に詰め一般のゴミと一緒にお金を払って清掃車に持って行かせていました。これはもったいないし、故人の遺徳を踏みにじる行為だと思い、「俺が落ち葉かきをするから、捨てないで欲しい」と市に頼み、4シーズンほど前から11月から2月までの休みの日を全てつぎ込んで落ち葉かきをしておりました。子どもと遊ぶ時間すらなくなってしまったので、困っておりました。昨シーズン、「クラ」という地域通貨のグループが出来たので、ものは試した、家の花苗のうち出荷できそうなワスレナ草の苗を350株ほど地域通貨で売って、稼いだ地域通貨で有償のボランティアを集めようと思い立ちました。その結果は素晴らしいものでした。12月の半ばに大人子ども十数名が集まってきて、わずか1時間半で2月までかかって集めていた落ち葉をきれいに集めてしまったのです。このことは、落ち葉かきをして稼いだ地域通貨で、サツマイモが買えるなら、地域通貨で「生きていける」あるいは「喰っていける」事を意味します。これはすごい、一次産品とりわけ食べ物が地域通貨で動くようになれば、地域通貨の重みが非常に増します。そして「ぼくたちの市場」というものが視野に入って来ました。

市場のイメージはよくテレビにでてくる様なアジアやアラブのバザールといった感じです。コミュニティを再構築しようとしたときその参加者各が全て自給自足をしている訳ではありませんから、それぞれの過不足を補いあうための「市場」というものが必ず必要になってきます。「市場」というと市場原理主義者やグローバリストらの悪いイメージを持たれる方が多いと思いますが、私たち普通に生活するための本来の「市場」を再構築する必要があります。これを目指しているのが、私たちの「元気野菜ネット」であります。現在は主に野菜を扱っているので、この名称を使っておりますが、将来きっと名称が変わると思います。

### **有機農業運動 × 地域通貨運動 × 生活クラブ運動 = 元気やさいネット**

以上のような下地の上に有機農業運動と地域通貨運動と生活クラブの運動が集まって出来たのが私たち「元気やさいネット・やまと」です。各運動がそれぞれに壁にぶつかっていました。有機農業運動では、先に述べたようなブームの下火で会員さんが減り続けたうえに、「産消提携」で消費者が農家を助けて、除草剤を使わない分発生する草むしりの仕事を手伝ったり、出荷や配送の仕事を手伝うということが、バブルに時代に「消費者は神様」という洗脳まがいの宣伝の中で忘れ去られていきました。また地域通貨

運動も、かけ声ばかりが先行して中身は伴わずにじり貧という運動もあります。生活クラブでも会員が高齢化し、新しい若い世代が入ってこないなど頭が痛い状況が続いています。

こうした状況の中で地域の安全で新鮮な有機野菜を地域通貨で食べられないかという事に取り組み始めたのが私たちの元気やさいネットです。インターネットはこれまであまり横のつながりのなかった活動を結びつける大きな変革をもたらしました。マスコミに採り上げられなければ、活動が広まらないというかつての状態から「横議横結」を容易にして、市民レベルでいろいろな情報や議論やりとりされ様々な共同作業が可能となりました。最近の事例をあげますと、信州のある有機栽培農家からダイコンが残ってしまって困っている、もうすぐきつい霜が降りるので何とか助けて欲しいという話が有機農業研究会の会員のルートを使って流れてきました。その農場は今年の夏に農園主がトラクターの横転事故で亡くなられ、女将さんと、研修生でやりくりしていたのですが、いろいろな作業が遅れてかなり厳しい状態にありました。私たちの元気やさいネットやクラブママーズのメーリングリストでこの情報を流すと、隣の「町田・大福帳」という地域通貨のグループや「あおば」という相模原の地域通貨グループ、大和市内の自然保護グループ、で大田区久が原の公園を市民が自主管理する活動をしているグループにも情報が伝わり、一週間もせずに 400 本以上の注文が集まりました。これは狭い意味での地産地消ではありませんし、地域通貨も使えませんでした。今後はこうした中山間地や過疎地で地域興しや環境保護をしている有機栽培農家や林業家や工芸家を支えていく活動も視野に入れていきたいと考えています。

### 相模国八十八か所元気農家巡り

「百聞は一見に如かず」ではありませんが、消費者で実際に野菜の生産をしているところを見たり、生産している方と話したりした方は意外に少ないと思います。僕たちが普段使っているたとえば石鹸や靴を作っている人と話したことがないように。ところが石鹸工場や靴工場と違って、野菜を育てているところは見えるのです。普段なにげなく通り過ぎている道路の脇の畑です。よっぽど凄い塀で囲っているところなどありませんから、見ようと思えばよく見えるのです。ここが農業のいいところです。生ずるい生産者がこそそと農薬をまいているのを誰かが見ているから、あそこは有機だと言っているけどこの間農薬まいていたよなどという話が漏れ伝わります。一方まじめな有機栽培農家はどうか自分の農場を見て欲し

いとみんな思っています。自分たちの仕事をちゃんと評価して欲しいのです。そこで私は有機栽培農家の紹介をかねて、毎月2～3軒の農家を消費者や新規就農希望者を集めて見学ツアーを開催しています。面白そうな農家の情報を集め順次見学をしています。四国八十八札所巡りにあやかって、「相模国（さがみのくに）八十八元気農家巡り」という呼び名で見学ツアーを開催しています。まだまだ始めたばかりで八十八カ所の元気な有機栽培農家（林業家や工芸家も含めたい）を巡る巡礼の旅が完結するにはまだ数年かかりそうです。満願成就のあかつきには大変な御利益がありそうです。消費者や新規就農者には特にお勧めです。とにかくいろいろな個性の方と出会い、創意工夫をしている姿を実際に見るということは非常に刺激的です。この札所巡りをWEB上で紹介していきますので、ここに掲載された農家が注目されることは確実です。僕らのHPを見た人なら誰もが関心を持って見えていますから、なおさらインチキができなくなります。是非皆さんも参加してください。またご自分たちでも回ってみてください。

このように元気やさいネットの大きな使命は、物と人を結びつけることだけでなく、人と人、あるいは人と情報を結びつけることも大切な使命であると考えています。

### 余談 ガーデニング・ブームのこと

数年前ガーデニング・ブームが日本中をおおっていましたが、テレビにでてくる「ガーデン・デザイナー」とか「コーディネーター」と称するお姉さま方が、あたかも洗濯機に粉石鹼をサラサラと入れるがごとく、オルトランなどの農薬を土に混ぜ、殺虫剤をシューシュー吹き付けているではありませんか？こりゃ、ひで～！！と思わず叫びましたが、先にも行ったように熱しやすく冷めやすい日本人の体質で、もうガーデニング・ブームは終わってしまいました。当時はホームセンターなどでも農薬の大きな袋を買い込んでいく女性を多く見かけました。折角身のまわりに緑を取り戻そうとしているのに、逆に農薬という毒物を生活空間に取り込んでしまっていたのです。これではまずいと思い、オーガニックガーデンを勧めようと思い立ちました。欧米ではオーガニックに庭造りをするのは普通であり、イギリスのガーデニング雑誌には、インタビュー項目として「あなたはオーガニックを指向していますか？」という設問が入っているくらいです。それから友知り合いが冗談半分に「恐怖の市民農園」という本を出したいな、と言っています。これはどういうことかということ、現在、市や区で貸し出されている市民農園の農薬使用がめっちゃくちゃで怖すぎるという実体

があるからです。生半可な知識で農薬のような毒を扱っているわけですから、これはたまったモンじゃありません。

## 2.働き方を考え直す。

### とらたぬ畑が働き方を変える！

これまでは流通のことを取りあげてきましたが、実はぼくたちの働き方や生き方も大きな変革の時期に来ていると思います。たくさんの人が仕事を失っています。またこれから増えるであろうと思われるのが「ワークシェアリング」です。少ない仕事を分け合います。しかし週のうち何日かは仕事がない状態になります。ところがどうでしょう、私たちの周りには耕作を放棄されて荒れ放題になっている農地があるではありませんか？

「食えない、食えない」と言っている人たちがいる一方で文字通り食べ物を育てる事の出来る空間が捨て置かれているのです。550円のパンをかつぱらおうとして、どうか東京駅のパン屋の店長を刺し殺さないでください。と私は言いたい。食べ物が欲しければ畑で作ればいいのです。畑がなくても近所の農家で草むしりでもすればありがたがってご飯ぐらいは食べさせてくれます。食べ物を作っているということの本当の強さが今のような大不況の時期に見直されるべきです。とりわけこの産業社会に依存してきた普通の人々が失業して、仕事を失ったとき、一体どうすればよいか、政府は実際答えを持っていません。私たちの政府は日本という大くくりのコミュニティの外観を持っていても本来の任務はとっくに忘れているか、最初からそんなことは考えていなかったと思われる。「市場」が一部の人たちに乗っ取られてしまったように、「政府」もまた特殊な利害を持った人たちに乗っ取られてしまったような気がします。35歳を過ぎると働き口が少なくなり、40台50台となるともう再就職が至難の業と言えます。私たちはいらなくなった機械のパーツのように産業廃棄物として「市場」のそとに投げ出されてしまうのです。現在の産業社会の中で企業に雇われてサラリーマンとしてしか生きていけない人は、スタインベックの「怒りの葡萄」にでてくる人々のように生きて行くしかないのです。私はもうこの「雇う」「雇われる」という関係にうんざりしています。あるいは元請けと下請けの関係にもうんざりしています。もっと対等な立場で仕事が出来ないものでしょうか？

「怒りの葡萄」でてくるような卑屈な働き方しか出来ないのでしょうか？

この様な状況で仕事のない人たちや安全な野菜を求めている人たちが集まって助け合いながら荒れ果てた土地を耕して自分たちの食べ物を栽培し、余ったものを自分たちの「市場」で欲しい人と交換しようという発想で生まれたのが私たちの「とらぬ狸のイモ畑」(通称とらたぬ農場)です。

### 時間は平等。「とらぬ狸のイモ債券」の話

食べ物を自給することを目的に始めた農園ですが、もちろんはじめから全て自給することなど不可能です。そこそこのものを可能な限り自給を目指そうとしています。そして今、様々な形で様々な都会人が農業生産に関われる仕組みづくりを試行錯誤しているところです。都会人といっても様々です。男の人の多くは平日の昼間働いているので休日の昼間しか畑に来れません。共稼ぎの女性の場合もこれに近い状態です。専業主婦の場合はもっと自由がきくでしょう。夏休みしか参加できない人もいますし、平日の午前中しか参加できない人もいます。かくいう私も休日しか参加できないのです。このようなまちまちの時間をまとめ上げて、ひとつの農場として機能させるのには、ここでもインターネットと地域通貨とその変種の労働債券「とらぬ狸のイモ債券」が役に立ちます。

とらたぬ債と呼んでいるこの債券は、市民ベンチャー事業をやり易くする道具です。どれくらい収量があるかも判らない農業生産を行うにあたって、たとえ地域通貨であっても1時間あたり何百円という賃金を払ってやることは主催者がかなりのリスクを背負い込むことになります。それに「雇う」「雇われる」という関係が生まれてしまいます。それよりはみんなが対等な立場で参加してその成果を分け合い、リスクも分け合うやりの方が参加者のモチベーションは高まり、「三人よれば文殊の知恵」と言うようにいろいろなアイデアが生まれ豊かな人脈がいきます。巨大な会社とは違って、資金も何もない市民グループですから大企業とは違ったやり方を考えねば太刀打ちできないでしょう。「とらたぬ債」は海賊や山賊みたいな「山分け方式」にはもってこいのやり方です。この債券には60MIN、30MIN、15MINという3種類があって畑で働いた時間分を事務局からもらえる仕組みになっています。1時間働くと60MIN1枚。3時間45分だと60MIN3枚に30MINと15MIN各1枚という具合です。トラタヌイモ畑の場合3畝半にの畑に700本あまりのさつま苗を植えました。土地を借りる手続きから、うねたて作業、草取りや収穫まであわせて108時間+アルファで現在集計中です。全体の収量も最終的にまだ集計中ですが、全体収量から苗代や

その他の経費を働いてさらに来年の種芋分も引きます。その残りを「とらたぬ債」の額面の労働時間の総和で割り、60MIN あたりの芋の収量をはじき出します。この割合で各自の債券時間分のサツマイモを分配するという仕組みでした。ところが現実には収穫期に幅があり、全収量が確定する前から、少しずつ収穫していきます。そこでこの分は「仮払い」ということにし、最終的に収量が確定した時点で地域通貨で精算しようということになっています。さらに来年度からは栽培品目が 20 種類を越えるので、とりあえず収穫分は、世間並みの相場を基準にして、とらたぬ農場の事務局に地域通貨で支払うことにします。すると事務局は地域通貨がごっそりたまってきます。年に 2 回盆暮れに精算をしてとらたぬ債券分の地域通貨を分配しようと考えています。こうすれば何十種類もひとつの畑で共同で栽培しても不公平が少なくできていると思っています。

インターネットも大事な道具です。私は畑の情報をメーリングリストでしょっちゅう流しています。本当は独自のホームページを持っていれば良いのですが、今製作中です。これを見ればいつどんな仕事があって、人が足りないのか余っているのかも知らせることが出来ます。実際に行けない人でも農場に対する常に共通理解が出来ますので、本当に役に立ちます。

ところで「能力主義」を標榜する現代の「市場原理主義」に洗脳されている人には納得のいかないことばかりでしょう。何で力のない女性や子どもたちと体の大きな若い男が 1 時間働いても同じ 60MIN1 枚なの？これについては正直悩みました。現在もまだ曖昧ですが、「エンデの遺言」を執筆された森野栄一さんに尋ねたところ、「時間は平等」という答えがすぐ返ってきました。確かに世界には 1 分で何十万円も稼いでいるといわれている人もいれば、限りなく 0 円に近い人もいます。同じ時間働いてもこのような余りにもおおきな違いがあることの方が変な気もしてきました。農業に従事する人は時間あたりの評価はとっても低いのです。かたや銀行などで働いている人の評価はすこぶる高いですね。かつて 60 パーセントもあった農業人口は今や 3 パーセントになっています。当然のことのように思えます。この辺の理屈を僕なりに考えてみました。それは相互扶助という考え方です。誰でも子どもの時は力が弱いけれど、伸び盛りで家計は厳しい。また年をとればとるで体のあっちこちにガタが来て、病院通いの費用も大変だ。そういう面倒をみんなで助け合うために能力以上の分配を子どもや老人たちにして行くのが「時間は平等」のやり方という風に説明しています。自分に子どもが産まれたら、とか年をとったときのことを考えてみなさい。と僕はいつも言っています。とらたぬ債は「相互扶助」という本来経済が持っていた機能を復活させようという願いが込められているのです。

## 有機・協働・相互扶助

とらため農場は一言でいえば、都会人が力を合わせ助け合いながら有機栽培で安全な食べ物を自給しようとする農場と言えます。この試みは今の社会からはじき出された人々のセーフティネットとなりますし、これまでの有機農産物が高価で庶民の手の届かないものだったのに対して、普通の人が食べられる価格にして、農産物と言ったらオーガニックが当たり前という状況を作っていこうという野望が潜んでいます。

「半農半 XJ」といういい方ははやっていますが、まさにとらため畑はこれを実現するための農場です。積極的な兼業農家であります。今まで都会的な産業に両足をのせていた人が、片足を農的な生産にずらしていこうという動きです。現在は第3次田舎ブームですが「ダッシュ村」の影響もあって簡単に田舎で暮らせると勘違いして非道いことになっている方をあちこちで見かけます。農業を甘く見て、気力さえあれば何とかなると考えている方も多いのではないのでしょうか？農業をやるということはひとつの事業を興すことであり、他の産業とその意味では変わりません。突撃していく人たちの前には丘の上の巨大な要塞が待ちかまえているのです。現在の状況は203高地状態と言えなくもありません。そこそこの準備や作戦を練る場所が必要です。とらため畑はその様な新規就農希望者にとっては訓練の場所を提供します。2~3反の農場は勉強するのには手頃な広さです。ここでしばらくやってみて、ある程度の自信が付いてきたら本格的に自分の農場を開くということもできます。中には生業として農業をやっていこうという人がでてくるかもしれません。私たちはその様な可能性を秘めた農場を作っていきたいと考えています。

### 3. そもそもの始まりから

もともと私自身は若い頃から「農」の世界に魅せられ、大学を卒業した後、もう一度農業大学で勉強をしようと考えていたほどです。ある事件がきっかけで、高校に行くのが嫌になっていた時期がありました。ベトナム戦争の映像や水俣の悲惨な映像を見て、社会に対する不信が心の中で渦巻いていました。そんなときに自分を助けてくれたのが「農」の世界でした。努力をすれば必ず報いてくれる正直な世界、人のものを横取りしたり嘘をつかないで済む世界に出会ったという感じでした。16歳の時から麦を播いたり、野菜を育てました。ところが家庭の事情やら何やらで、農業大学に



も行けず仕舞いでした。大学を卒業した頃は第 2 次オイルショックの後で低成長期にはいると信じられていましたが、なんと政府は中曽根バブルを起こしてしまったのです。田舎で土地を探してみようと思いましたが、2 倍 3 倍と跳ね上がる土地を手放したり、貸したりする人はいませんでした。こんな状況で父も病気がちでしたので、(一時農業関係の雑誌社に勤めていましたが、)まゝ少し金でも貯めようという思いで家業に従事しておりましたら、今度はバブルの絶頂で父を失い、莫大な相続税を課せられ生涯に渡り国家の債務奴隷ということになりました。バブルによって 2 度も自分の夢を踏みにじられ、さらにこの大不況でもう人生の電源ボタンを切ろうかと思っていました。ここで、また私を助けてくれたのが畑でした。小さな自宅の畑に願いをかけました。どうか死ぬ前に自分に最後の力を与えて下さい、と。すると数日後、私が若い頃に畑を耕している姿を見て感動し、農業高校に進み、今農業大学で仕事をしている人に十何年かぶりに道で会いました。正確に言うとその人の車に轢かれそうになったのです。彼はいまだに農場を持ちたいと地方を探しているそうです。う～ん。そうだったのか～とひとしきり感慨にふけりました。僕が若い頃彼に与えた火を再び彼から自分に返してもらったことになります。消し炭のような私に再び火をつけてもらったのです。今年でもう 45 歳です。残りの人生(30 年あるでしょうか)は自分の若い頃やりたかったことをやってみたいという気持ちになりました。そうこうするうちに、神奈川県農業大学で中高年を対象に新規就農の研修コースを開くという情報が入り、面接を受けたら合格してしまいました。また県の環境農政部が来年からホームファーマー制度という耕作放棄地を市民に貸して復興させる事業を始めるといった情報が入ってきたので、問い合わせたところ、地域通貨を使い協同でやるというのが目を引いたらしく運良くモニターとして採用され、今は相模原で「とらたぬ畑」をみんなで耕作しています。ホームファーマーで生産されたものは円通貨では売っては行けないという規制があります。このために私たちは地域通貨が使える市場として注目されているのです。

畑に願いをかけたのが良かったらしく人生のリセットボタンを押したような結果になって今日に至っております。先の「元気やさいネット」構想も大和市の方で面白いから経済産業省の市民ベンチャー事業助成に応募したらというアドバイスを受け、申し込んだらなんと通ってしまったという強運の事業です。

公園の落ち葉かきを地域通貨で始めてから今までわずかに 11 ヶ月。自分の力というよりは、時代の流れに乗ってしまった、あるいは押し出されて

いるというエネルギーを感じています。時代は大きく変わっています。かつてルネッサンスが「暗黒の中世」から生まれたように、ぼくたちがやっていることは「暗黒の近代」からの脱出を試みているルネッサンスの運動ではないかと最近感じています。折しもイタリアから、「スローフード運動」が全世界に広まろうとしています。これなどを見ているとただ今のルネッサンス運動もやはりイタリアから始まっていくのかという不思議な印象を持っています。

21世紀が20世紀の負の遺産を背負ったまま何の変革もなくただらと続いていくことに対してもう我慢できないというのが私の正直な気持ちです。